あなたを一人にしない　私たちに相談してください
大阪弁護士会 総合法律相談センター TEL 06-6364-1248

会員探訪 第8回 Portraits

元漫才師と元広告マン

他人に何かを伝えるときに、何をどう伝えるかという問題は、おそらく大抵の仕事につきものの悩みだと思います。弁護士も、相手方はもちろんのこと、顧客に対してもそのような悩みがあるのではないでしょうか。今回は、そのような仕事を生業とした方、片や広告代理店勤務、片や漫才師（今は、DJ）という経歴を持つ会員です。
彼らが、「伝える」に際して、どのように物を見て、どのように動いたかを聞いてみました。

角田龍平 弁護士

61期　角田龍平の法律事務所　元漫才師

漫才

洛星高校３年のときに、テレビ番組の企画でオール阪神・巨人のオール巨人師匠に弟子入りしました。その企画で知り合った相方と組んだ「おおかみ少年」という漫才コンビで挑戦した今宮戎新人漫才コンクールで大賞を受賞し、立命館大学法学部にも一芸入試で合格しました。

巨人師匠の弟子時代は、テレビ番組の前説をしたり、舞台に上がったりしながら師匠の身の回りの世話をしていました。当時兄弟子と私と二人で付いていたのですが、弟子が車の免許を持っていなかったので、運転席に師匠、助手席に兄弟子、後部座席に私というおかしなフォーメーションで移動していました。巨人師匠の買ったばかりのゴルフクラブを打ちっぱなしで投げっぱなしたこともありました。巨人師匠は厳しい方でしたが、根底に優しさがあり、心から尊敬できる師匠でした。ただ、ご実家が鶏卵店ということにちなんで個人事務所の名前が「有限会社コケコッコー」だったため、お店で領収書の宛名を言うたび恥ずかしい思いをしました。巨人師匠には今でも年に何回か飲みに連れて行って頂きますが、師匠のお話しを聞きながらお酒を酌み交わす夜は何物にも代え難い幸せな夜です。若い頃、徒弟制度に身を置き、絶対的な師匠と出会えたことは本当に幸運でした。

漫才を辞めたのは、舞台袖で多くの芸人さんの芸を観ているうちに、私の好きな芸人は生まれながらのナチュラルボーン芸人といいますか、良い意味で職業選択の自由のない、選ばれし人たちであることに気

づき、自分のような凡人は舞台に上がるべきではないと考えるに至ったからです。そんなことを考えながら師匠の付き人として同行していたNHK「生活笑百科」の収録現場で、私はあることを思い立ちました。笑福亭仁鶴にも上沼恵美子にもオール阪神巨人にもなれないけれど、回答者の席に座っている弁護士には比較的容易になれるのではないかと。一人だけ常識的なことしか言いませんからね。そこで、漫才を辞めて司法試験を目指すことにしたわけです。

私の目論見は大きく外れました。4年に1度のサッカーW杯フランス大会の年（1998年）に司法試験の受験を始め、日韓共催大会（2002年）を経て、合格したのはドイツ大会（2006年）の年でした。

修習終了後は、橋下綜合法律事務所に入所しました。橋下弁護士は、毀誉褒貶相半ばする人ですが、事務所在籍中は自由にさせてもらって感謝しています。「オーディションに合格したので、オールナイトニッポンのDJやっていいですか？」と聞いてきた弁護士登録3か月のモンスターイソ弁に、「いいよ。いいよ。」と即答するボス弁はなかなかいないと思いますよ。その寛容さを政治的に対立する勢力にも見せていただきたいものです。

ラジオ

弁護士登録した2008年の冬にニッポン放送「オールナイトニッポン・パーソナリティーオーディション」に合格し、翌年から「オールナイトニッポンR」（昔のオールナイトニッポンの2部です）のパーソナリティーを務めました。男子校で悶々としていた青春時代、出口が見えずもがき苦しんでいた司法浪人時代、ラジオの深夜放送だけが心の支えだった私にとって、オールナイトニッポンは夢の舞台でした。リスナーにラジオを愛する気持ちが伝わったのか、3か月で終了する予定で始まった番組は1年間続きました。

ラジオの魅力は、テレビと違いリスナーとの距離が近く人格的接触ができることです。ただ、触れたくない人格に触れることもありました。2ちゃんねる※に番組のスレッドが立っていたのですが、そこでいつも私のことをほめまくる書き込みをする人がいました。その人は書き込むときにやたらとスペースを空けるので、いつしかスレッドで「スペース」というあだ名で呼ばれるようになりました。スペースの書き込みは意味不明意図不明なものが多く、スタッフ間でもスペースは番組で取り上げてはいけないアンタッチャブルな人物だと認定していました。そんなある日、私のパソコンに普段はメールを寄越さない父からメールがきました。そのメールを読んでみると、あろうことかやたらとスペースが空いていたのです。疑惑を解明すべく司法研修所で習った犯人性の考え方を応用し、スペースの書き込みから推認できるその特徴と父の特徴の類似点を検証していくと、スペースは父であるという衝撃の事実が判明しました。17歳の高校生のフリをして2ちゃんねるに書き込みを続ける64歳の父の話を公共の電波ですることは身内の恥を晒すようで躊躇しましたが、番組で「スペース追跡回」としてスペースの書き込みとその犯人性を証明していく過程を話したところ、予想以上の大反響で一般紙の読売新聞からサブカル紙の「クイック・ジャパン」まで取材を受けることになりました。パーソナリティーとリスナーが意思を通じて聞いてはいけない話を共有し共謀関係を形成するのが深夜ラジオの魅力なのです。

テレビ

弁護修習のとき大変お世話になった弁護士が「弁護士は他人の事件に手を突っ込んだらあかん。」とおっしゃっていた意味が、自分もテレビに出てみてよくわかりました。弁護士といえども担当していない事件については、報道の範囲内でしか知らないわけです。マスコミが報道しない当事者の事情はいくらでもあるし、当該事件を担当している弁護士の苦労も同業者ならわかるはずです。にもかかわらず、関係ない弁護士がしたり顔で無責任なコメントをするべきではありません。

また、テレビは事件報道、芸能人のスキャンダル報道を問わず、ターゲットを変えては一方的にバッシングする傾向があります。テレビに出ていて同調圧力を感じることもありますが、弁護士がそこに加担することはあってはならないと思います。

テレビとラジオに出演して思うことは、日本が右傾化し、今こそ多様な言論が確保されなければならないのに、マスメディアは、スポンサーへの配慮、大手プロダクションへの配慮、ネットで炎上することへの配慮等で雁字搦めになり、表現の幅が極端に狭くなっているということです。個人的な考えですが、こういう時代だからこそ、本来何者にも縛られない弁護士会が自前のメディアを作って、専門性を生かした議論を社会に発信していくべきではないでしょうか。ニコニコ動画でもユーストリームでも簡単に配信できる時代なのですから。

（Photo：武田）

※日本最大の電子掲示板サイト